

二度目は、南会津町立檜沢（ひさわ）中学校の教頭時代である。教頭が同居などと言ったら大問題であるが、相手は男性だった。それも隣の檜沢小学校の教頭先生である。なぜこうなってしまったのか。

檜沢小学校の教頭先生は、南会津町田島のアパートにお住まいであった。平成23年の2月下旬には、ご自分が転勤することがわかり、アパートの大家さんに3月いっぱいアパートを出ることを伝えていた。3月上旬に内示が出てのあの3月11日である。震災の影響もあり、田島のアパートへの入居希望者が増えていた。大家さんからすると、3月いっぱい出るといった檜沢小学校の教頭が、なかなか出て行こうとしないわけである。当たり前である。いつ異動になるのかわからなくなっていたのであるから。大家さんに催促されても、檜沢小学校の教頭も答えようがない。彼も困っていた。郡山から通うことも考えたようだが、さすがに無理がある。

事情を聞いた私は、何とすることもなく「うちの住宅、オンボロだけど、部屋が3つあって、1つしか使っていないから来たら」と言ってしまったのである。このときは、私もせいぜい5月いっぱいくらいまでだと思っていた。それが7月いっぱいまで続くとは。私がお世話になっていた住宅は、元々校長住宅で広いのである。広い、冬は寒い。広い、掃除が大変。真ん中には無駄に広い廊下があり、卓球台を置いて卓球ができるくらいだった。

檜沢小学校の教頭先生は、布団をもって本当に転がり込んできたのだった。ここから教頭二人の同居生活が始まったわけである。私は、自分の校長先生には事情をお話ししたが、他にはだまっただけにしていることにした。普通は、小学校よりも中学校の教頭の方が退勤時間は遅くなるものなのだが、檜沢の場合は逆だった。檜沢小学校には、いつまでも帰らず残っている熱心な教員が2名いたのである。教頭もそれに付き合っていた。

一方、檜沢中学校の教頭である私は3年目で余裕ができ、20時30分頃には帰っていた。すると、私がお風呂を洗い、お湯をため、ヨークベルマルに行き、夕食を準備するわけである。そして、同居人である小学校教頭の帰りを待つわけである。よく考えると、現在の私の生活もこんな感じである。

彼が帰ってくると、二人で食事をしながら、小学校と中学校の違いや教育論などについて話をする毎日となった。佐藤学先生の学びの共同体、大村はま先生、斎藤喜博先生、向山洋一先生などが話題に上った。授業についても語っていた記憶がある。一番割合が高かったのは、彼の愚痴だったのだが。私は、いつもその愚痴を聞かされていた。

こんな奇妙な生活が7月まで続くこととなった。近所の方には、だいぶ怪しまれていたことと思う。毎朝、中学校の教頭の家から小学校の教頭が出てくるわけであるから。噂にはなっていたと思う。でも、近所の方々からは、何の話も出ることはなかった。

数年前に、機会をいただき、つくばでの研修に1週間ほど行ってきた。福島県からの参加者は4名であったが、その中に、私の元同居人の彼の名前があった。おかげで、昔話に花を咲かせながら、つくばでの生活を満喫することができたのである。

今思うと、檜沢中学校での教頭時代は、おもしろいことがいっぱいあったと振り返ることができる。中身の濃い充実した日々であった。人の縁、人のつながりというものは不思議なものである。すべては偶然とは思えない。常に何かに引き寄せられる感覚がある。さすがに、三度目の同居生活はないと思うが、これからもどんな方と出会うことができるのか楽しみではある。